

## 「デーケン先生との出会い」

1A11037 浅野泰世

3月11日の東日本大震災は、日本の歴史の転換期になるだろう。新しい日本、新しい日本の文化を創らなければならない。そのために、『出会い』を大切にすることを提案したい。そこで、今日は私の『出会い』についてお話ししたい。

そこで語られた「出会い」は、むしろ、不条理や、辛い試練でした。

4歳の妹さんを白血病で亡くされた時のお話。

最期の日、家族一人一人と握手をして「天国でまた会いましょう」と言いながら死にました。「希望を抱くことの大切さ」を妹から学びました。

連合軍の兵士を白旗で迎えたにもかかわらず、目の前で射殺されたおじい様のお話。

私はこの兵隊を決して許すことはできないと思いました。しかし、キリスト教の教えは、「汝の敵を愛せよ」です。おじいさんは私に恵みを与えてくれたと考えるようになりました。私はこの時に、生まれた時に親に与えられた信仰を、自分自身で選びなおすことができたのです。

患者さんの最期の3時間を共に過ごしたお話。

私は人生の最期の時間何を話すべきか迷いました。そして最後には一緒に祈るようになったんですね。この自分の人生で最も長い3時間に「生」と「死」について深く考えるようになりました、そして「死の哲学」を勉強することを決断しました。

デーケン先生は、これらの辛く悲しい出会いが、同時に「希望」「信仰」そして、自らの「天命」との出会いにつながったと語ってくださいました。

過去や現代の人間の知恵との「出会い」

古代ギリシャの「時間」には、時計で計る物理的な時間（クロノス）と、人の内面で感じる唯一無二の時間（カイノス）がある。

私たちはこれから、毎日の時間の尊さを発見することが重要です。人間はみな、クロノス的な時間は限られている。しかし、今日は大切な日である、もしかしたら、今日私たちは人生を変えることができるという、カイロスの時間重要です。

ガブリエル・マルセルは、人間が遭遇する「問い」には、自分の外部に客体としてとらえ、技術によってコントロールが可能な問い（＝問題）と、人間がコントロールすることができず、したがって、自分自身の実存を巻き込み、謙虚に自分の限界を認めることによって対処しなければならない問い（＝神秘）という側面があると教えている。

日本の医学教育の殆どは「問題」解決に適合した手段を教えている。しかし、患者さんが治らない状況になった時、医学は何もできない。その時、患者さんは非常にさびしく感じる。人間と死との闘いで、必ず勝つのは死です。なぜなら、日本人の死亡率は現在のところ100%です。日本の文化の問題は、神秘をも、問題解決の次元に還元しようとしていることです。問題は解決できないこともあるんです。

人間を超えた存在に謙虚に向き合うことが、目の前の人の悲しみや苦しみを知り、思いやりを持って接することにつながることを教えていただきました。

子供時代の父との深い出会いが、生涯を通じて人生の基盤となっていること。

ユーモアを持つ人は、深みのある出会いを持つことができる。私はそれを父から学びました、温かい家族になることができたんですね。ジョーク（言葉の技術）ではなく、愛と思いやりの表現であるユーモアが、これからの日本に大切です。

デーケン先生の語りが非常に説得力を持つのは、自ら厳しい苦難をのりこえた体験に根差すものであること、深い知識と洞察に裏付けられていること、そして、人に対する「愛」と「思いやり」が常に根底にあることだと感じました。

先生が、「新しい日本、新しい日本の文化を作らなければならない」と言われたとき、日本の社会が、人の限界や弱さに冷淡な社会ではなかったか、人と人とのつながりが希薄になった社会ではなかったかという厳しい問いが含まれているのだと考えました。今日の講義で私は先生から、大きな宿題をいただいたと思います。